世界日報 (9) オピニオン 平成13年(2001年)10月11日(木曜日)

マスコミ論評

テレビ

感動的だが言及不足のプロジェクトX「ユーロトンネル」

かなりの視聴者に感銘を与えていると評判も上々のNHKドキュメンタリー・プロジェクトX「巨大モグラードーバーを掘れ」(九月二十五日)が放映された。英仏海峡にトンネルを掘って欧州大陸と英国とを陸路で結ぶことになったユーロトンネルの掘削を、日本の技術者が中心となって成功させたストーリーを取り上げたものだ。

寡聞にして筆者は、欧州でその工事の核となるトンネル掘削に、日本の企業が深くかかわっていたとは知らなかった。フランス当局が一九八〇年代半ば、川崎重工に名指しで掘削工事を依頼してきたということだ。

その直前、十数年の歳月をかけて青函トンネルを完成させたばかりの日本だった。世界が注目するのも当然だったろう。その技術、経験の蓄積を考えれば、この要請はある意味で自然な流れだったかもしれない。

この時に活躍したのが「鉄のモグラ」という異名を持つハイテクを駆使した直径八メートル強の掘削マシーンだった。途中、この「モグラ」の働きが不調となり、トンネルの中でその修理を行うことを余儀なくされ、困難な局面に立たされた男たちが、寝食を忘れて、状況打開に投入する姿は感動的だった。

共に働いたフランス人労働者たちも頭が下がる大健闘だったことが伝わってきた。一九六〇年代当時、ドゴール大統領が訪仏した池田首相を指して、「トランジスターのセールスマン」と言ったという話がある。

個性を重視するというフランス人は、日本人のメーカーによる集団的なモノ作りに対して軽べつ的な視線を投げ掛けてきた。しかし、この番組内容のように、フランスのためトコトン投入する姿勢がフランスで報じられているとすれば、同国の日本人観を一変させるのに役立ったのではないか。まだ正しく伝えられていないのなら、同番組をフランス語訳してでも、フランスのTVに放映を働きかけるべきではなかろうか。

とかく日本は、メッセージの発信が下手だといわれる。日本ならではの技術により他国の、それも欧州先進国の大プロジェクトの根幹を担って成功させた事実ははっきり伝わってしかるべきだ。

『番組のナレーションはいつも淡々とセーブしたトーンで、逆に効果を盛り上げている。だが今後、最もこうした技術が生かされるべきプロジェクトについて全く言及がなかった。言うまでもなく日韓トンネル・プロジェクトである。

この構想は、歴代、韓国大統領が何回か公式の席上で言及した内容である。韓国に気を使う必要など何もない。いわんや日本にこれだけの技術があるのだ。「次のチャレンジは日韓トンネルだろう」との言葉が抜けたのは、かえって不自然だったのではないか。』

(山本 彰)